

『グローバルと日常』

若林 秀樹

「グローバル」という言葉を耳にする機会も増え、自分でも意味がわかったような気になっていた。しかし、あらためて考えると今ひとつ掴み所がない。そこでこの機会に、「自分にとってグローバルって何だろう」と改めて振り返り、拙い文章に綴ってみた。

昔、中学校の教員をしていた。しかも24年間も。大学卒業時、詳細は省くが当時の夢を諦め、「まあ何でもイイや」、みたいな気持ちで教員採用試験を受けた。だから教員になっても、最初は本当に大変だった。中学校という世界が、「集団」を重んじ、「少数派」を認めない世界に思え、そんな空気にムキになって反発した。当然、周囲から私への評価は概ね冷ややかだった。同じ学校で働く先輩教師からは、「若林くん、教員辞めたら？」なんて言われたこともあった。

「体制に反発した」と言えば格好イイが、夢をあきらめて教員に落ち着いてしまった自分自身への、大きな苛立ちがあった。本当に恥ずかしい話だが、私は30歳を過ぎても、こんな風に「自分探し」を続けてモヤモヤしていた。

教員13年目、転機が訪れた。勤務する地域に、南米からの労働者が居住するようになり、日本語や生活習慣が全くわからない子どもが次々に編入してきたのだ。別の学校から籍を移動するのは「転入」（いわゆる転校）だが、外国人は元々の籍がないので「編入」という。そんな環境の中、私は近隣中学校への異動を機に、「外国人児童生徒担当教員」になった。

「外国人児童生徒担当教員」といっても、一般の人たちにはピンと来ないだろう。外国人が多い小中学校に配置される教員で、日本語指導の他、日本語が不十分なために遅れている教科学習指導、学級担任と連携を図って様々なサポートが主な仕事となる。参考までに、栃木県教育委員会は40の公立小中学校を「外国人児童生徒教育拠点校」に指定していて（2017度）各校に「外国人児童生徒担当教員」が配置されている。

私が担当教員に就いた当時の「外国人児童生徒教育」はほとんど未開の分野で、指導に関する規定やマニュアルも無かった（いまでもあまり無いのだが）。しかし、手探りや試行錯誤が要求される仕事は、「これをやりなさい」と指示されるより私の性に合っていた。しかし、私は「出稼ぎ」という親の意思によって、日本に連れてこられ、この異国で生きることになった子どもたちの姿に、ショックを受けた。

子どもたちが、言語や生活、そして自分のアイデンティティや家族について悩みながら、必死になって「自分探し」をする姿に、私はハッとさせられた。「かれらのために夢中で働いてみよう」。私は決心し、それまで引きずってきた、モヤモヤした「自分探し」に一旦ピリオドを打つことにした。思えばこれが、「自分にとってグローバル化って何だろう」、の出发点だった。

一日中外国人の相手をしていると、他の教員から「若林先生は、毎日まるで外国に居る気分でしょう〜」、などと言われたが、それは全くの間違いだった。毎日が、「自分が日本人であることを思い知る」日々だった。

「どうして、ひらがなと漢字を使い分けるの」、「どうして縦書きなの」、と聞かれ、その場で子どもを納得させなければならない。「書く時は紙を真っ直ぐ置く」「姿勢を正す」など、日本人の子どもには「日常的」なことも、いちいち納得しなければ先に進めないのである。

そんな時、私はイラストを使いひらがなの成り立ちを説明した。また、「昔はみんな筆で書いていた」と伝え、その手に筆ペンを持たせた。そして、子どもにとって覚えたばかりのひらがなで、「ありがとう」の文字を、「縦書き」と「横書き」で書かせた。もう説明は不要だった。子どもは、「日本語は縦書きのほうが書きやすい」と身体で感じ取り、私に向かいニッコリ笑うのだった。

「学校生活」という、子どもにとっての「日常」が成り立たないので、保護者との接点も多く生まれた。家庭訪問し子どもの学校での様子を伝えたり、持ち物について身振りや実物を使って伝えたりした。そんな時、「ワゴンシャ」の「ソーゲー」で、工場から帰宅したばかりの母親は、誰もが快く私を向かえてくれた。ちなみに、「ワゴンシャ」も「ソーゲー」も、派遣労働の外国人の間では「日常」となっているニホンゴである。

昼間の、いわゆる3Kと言われる工場勤務で疲れているにもかかわらず、ろくに通じない私の言葉を熱心に聞いてくれた。母親たちが出してくれる飲み物は、なぜか必ずとっても甘かった。私は、日本の食生活とは明らかに異なる匂いでいっぱいのキッチンに座り、どの家族も必死で日本での「日常生活」を築き上げようとしているのを感じていた。

外国人と接していると、かれらが日本での「日常」を築く上での困難に、色々な場面で接することになる。

中学校の保護者面談では、「高校進学は難しい」との担任の言葉に、その場で涙する親子がいた。NPOが開催する外国人のための学習教室には、忙しい仕事の合間をぬって送迎する両親の姿があった。我が子の成績に悩み、私にこっそり「家庭教師をやって欲しい」と頼む親もいた。将来、子どもが幸せになって欲しいという「親の願い」は、日本人と何ら変わらなかった。また、教育費を賄うため、安定した仕事を得ようと、夜間の日本語教室に通う保護者も多かった。

ある時、外国人子どもの父親から、「オレ達は苦勞を覚悟で日本に移住しているのに、日本人はオレ達を受け入れる覚悟をしていないよな」と言われ、返答に困ったことがあった。一方、近年日本では、「世界で通用する若者を育てよう！」など、外向きのグローバル化ばかり謳われ、私はどうしても現状とのズレを感じてしまう。日本に住む大部分の外国人は、私たちと同じように、「普通の生活者」になりたいのだ。「日常を築くことの尊さに国境は無い」ことに、日本人もそろそろ気付く必要がある。

「外向きが不要だ」、などと決して思わない。しかし、外国人が必死になって、当たり前の「日常」を築こうとしている現実こそ、最も近くに存在する「生（ナマ）のグローバル」であり、私たちが最初に目を向けるべきことではないだろうか。私にとっての「グローバル」は、この狭い日本にひしめいている、様々な違いを抱えた人々の「日常」をごちゃ混ぜにした、「ませご飯」のようなものだ。

〈初出：『世界を見るための38講』第24講、宇都宮大学国際学部編、下野新聞社〉